

## アドラー心理学に基づく親教育とそれ以外のプログラムの比較

堂坂更夜香<sup>1</sup>・服部弘子<sup>1</sup>・向後千春<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>早稲田大学大学院人間科学研究科・<sup>2</sup>早稲田大学人間科学学術院)

### 【問題と目的】

近年、子育てスキル獲得だけでなく人間性の発達を目的とした親教育が求められている(藤後, 2004)。アドラー心理学に基づく親教育の目的は、共同体感覚 (social interest=社会への関心) の育成である (Ansbacher & Ansbacher, 1956)。この共同体感覚とは、「自己受容・所属・信頼・貢献」の感覚である (野田, 1991)。多くの学派が原因論をとるのに対し、アドラー心理学では目的論をとる。これは、個人の課題達成を目指す未来志向のプログラムである。親子間に起きる問題も誰の課題か責任の所在をはっきりさせる。そして、子どもの課題か、親の課題か、共同の課題かを分離させて行動に移す。つまり、親子相互に個人の自立と成長発達が期待できる。そうしたなかで、我が国では親教育プログラムを系統的に整理した論文は少ない。本研究は、アドラー心理学の親教育とそれ以外のプログラムを概観し比較することによって、今後の親教育のあり方を検討することを目的とする。

### 【方法と結果】

アドラー派と他学派の親教育のプログラム実践事例を収集し、それぞれの特徴を概観して比較した。

Adler は、1922 年にウィーンに公立の児童相談所を設立した。そこで、問題行動を起こす子どもとその両親、教師を集めてオープンカウンセリングを行った。そこには同じ悩みを抱える他の家族やアドラー派の治療技法を学ぶ者が参加しアドラーから直接教育を受けた。これがアドラー心理学における親教育の始まりである。

その後、アドラーの弟子である Dreikurs が理論や技法を体系化した。そして、専門家のみならず一般家庭にもアドラー心理学を浸透させた。それを受けて Dinkmeyer (1976) が、グループ学習プログラム「STEP-Systematic Training of Effective Parenting」(以後、STEP) を開発した。日本には柳平(1982)によって STEP が輸入された。その後、野田ら (1986) によって SMILE が開発され、Passage (1998)、Passage Plus (2014) に発展した。Passage は、子育ての行動面の目標として、「自立すること」、「社会と調和して暮らせる」ことを提示している。また、子育ての心理面の目標には、「私には能力がある」「人々は仲間だ」と感じることにしている。そして、更に深いところへの学びとして Passage Plus が開発された。それぞれの主な技法には、Passage は「賞罰のない育児・課題の分離・目標の一致・自然の結末」があり、Passage Plus では「勇気づけ・共同体感覚・葛藤解決・家族会議」がある。アドラー派の親教育には上記の他に Nelsen (1981) の Positive Discipline、Popkin (1983) の Active Parenting がある。

アドラー派と同じように家庭内の民主主義を提示している親教育に、Gordon (1962) の「PET-Parent Effectiveness Training」(以後、PET) がある。近藤千恵 (1970) は、PET を「親業」として日本に紹介した。PET の特徴は、「能動的な傾聴・I/You-message・行動の四角形」などがある。STEP と PET は、子どもと民主的な関係をとる点や、賞罰を使用しない点など、類似点も多い。しかし、PET は感情に焦点を当て、親子間の不快感情をなくすことを問題解決とするのに対し、STEP では、感情は扱わず責任の所在を明らかにして協力的な関係を築くことを重要課題とする。また、親役割が PET はカウンセラー的であるのに対し、STEP では対等なパートナー的立場をとることである。これは PET が原因論的、STEP が目的論的アプローチを取る違いと言えよう。その他、認知行動療法に基づいた親教育プログラムとして、コモンセンス・ペアレントトレーニングや Nobody's Perfect などが挙がる。

### 【結論】

以上、親教育の代表的なプログラムを概観した。その結果、いずれも親子を援助する目的で考案されていた。しかし、問題や課題のとらえ方が異なりアプローチの仕方もそれぞれに違いが見られた。なかでも、目的論をとるアドラー派の親教育は問題解決ではなく共同体感覚の育成、すなわち人間性の発達や協力的な人間関係の構築の援助を目標としていた。これは、健康的な生活を送る親子の双方に、自立と人格の成長発達を促進することが期待できる。

#### 引用文献 (一部)

- Ansbacher, H. L., & Ansbacher, R. R. (Eds.) (1956). *The Individual Psychology of Alfred Adler: A systematic presentation in selections from his writings*. New York: Basic Books.
- 藤後悦子 (2004). 青年期を対象としたペアレントトレーニング教育の導入—アメリカのペアレントトレーニングプログラムの例—日本家庭科教育学会誌, 47 (3), 248-254.